

「ゴルフは老若男女 プレーできる稀有な 男子ゴルフを世界に



左から、徳山一晃・NSSKシニアパートナー、津坂純・NSSK社長、倉本昌弘・日本ゴルフツアー機構副会長、阿久津未来也・選手会長

ことで、初めてゴルフを知らない人が、「あ、そんなスーパースターがいるんだ」ということを知っていただける。そして、例えば、阿久津プロをフォローをしたいただとか、プライベートを知りたいだとか、練習方法を知りたいと。そういうことは、まず情報を発信していないと、ファンの方たちも知る機会がないですよね。

われわれがやろうとしているのは、そうした仕組み作りです。具体的には、コンテンツ作りから幅広いSNSや専用アプリを含むメディアへの露出、データの活用やデジタル発信、EC（電子商取引）、地域との連携などを通じて、ツアーを日常的に関われるコンテンツへと進化させていきます。

スポーツ事業をビジネスにある程度切り替えていく。リアルとアナログを組み合わせ、今まで以上にプロゴルフの魅力を発信していく。ですから、メディアエンタメ事業でもあるし、デジタル事業でもあるというこ

とで、様々な仕掛けをしているかと考えています。

——なるほど。そうした事例をつくることであれば、他のスポーツへも共有することができそうです。

津坂 はい。ゴルフ以外の違うスポーツ、違う業界でも応用できると思っています。

**どん底から
浮上するために…**

——では、今度はJGTOの立場から見ると、NSSKグループと連携することの意義をどのように受け止めていますか。

倉本 わたしは1年半くらい前に初めて津坂さんにお会いして、様々なお話を聞きながら、「倉本さん、ゴルフ界はもっともっと可能性があるよ」ということを言っていたきました。

ですから、是非、NSSKさんと一緒にやっていきたいと思いましたが、われわれも自分たちからの発信が足りないことは気づいているんですが、どこから始めたらいいのかが分からな

が一緒に スポーツ。 通じるコンテンツに」

「男子プロゴルフは日本有数の規模と潜在価値を持っているのに、その魅力が十分に発揮されていない」——。一般社団法人日本ゴルフツアー機構(JGTO)への投資を決めた日本産業推進機構(NSSK)グループ。なぜ、投資ファンドと男子プロゴルフが連携するのか。津坂氏とJGTO副会長の倉本昌弘プロ、同選手会長の阿久津未来也プロによる特別座談会——。

日本産業推進機構社長

津坂 純

Tsusaka Jun

日本ゴルフツアー機構副会長

倉本 昌弘

Kuramoto Masahiro

同選手会長

阿久津 未来也

Akutsu Mikiya

司会・本誌主幹 村田 博文

潜在的な価値を どうやって出していくか

——まずはなぜ、日本産業推進機構(NSSK)が日本ゴルフツアー機構(JGTO)へ投資するのか。改めて、その狙いを聞かせてもらえますか。

津坂 わたしは、男子プロゴルフというものが日本有数の規模と潜在価値を持っているのに、その魅力が十分に発揮されていないと思うんです。

日本では古くからゴルフが社会に浸透し、経済的にも、社会的にも大きな位置づけにあるスポーツです。日本のゴルフ市場は約1・4兆円規模、競技人口も約800万人と、国内有数のスポーツ産業ですから、その潜在的な能力というか、潜在的な価値をどうやって出していくか。それを出すことによって、日本の男子プロゴルフは世界水準のものに変わっていくことができると思います。

米国には、世界の男子トップゴルフアが集うPGAツアー

があります。われわれはそうした成功例を参考にし、日本のプロでもPGAツアーでプレーされた選手が何人もいますので、実態と実感を組み合わせることによって、日本の男子プロゴルフツアーの潜在力を発揮していくと考えて、NSSKグループがお声をかけていただきました。

——競技人口が約800万人というのは大きいですね。

津坂 800万人の競技人口というのは圧倒的ですよ。これは野球、サッカー、ラグビー、全部足しても800万人になりませんから。

でも、まだまだ男子プロゴルフが知られていない。今回お越しの倉本プロや阿久津プロのように、スター選手は沢山いるのに、その魅力が伝えきれていないんですよ。では、選手の魅力を伝えるにはどうしたらいいのか？ まずはメディア戦略ですよ。

メディアのコンテンツをしつかりつくって、それを発信する



くらもと・まさひろ

1955年広島県生まれ。日本大学卒業。81年プロテスト合格、初戦の和歌山オープンでいきなり優勝。92年の『ブリヂストンオープン』でツアー25勝目に到達し、永久シード入り。24年からJGTO副会長をつとめる。

——では、男子プロゴルフの活性化に向けて、どこから手をつけていきますか。

津坂 やはり、魅力をいかに引き出すかというところでは、まずはメディアに露出しなければなりません。ですが、メディアに露出するためには、コンテンツが無いですから、まずは

——改めて、ゴルフの良さはどこなところにあると考えますか。

倉本 やはり、ゴルフは健康にいいということと、何歳にな

く初めての大きな変革の中に自分が当事者として身を投じて、携われているというのは、本当に嬉しいですし、楽しいことだと思っています。

——選手たちにとってもワクワクするような取り組みになっていると。

阿久津 はい。やはり、男子ゴルフの発展につながる挑戦であれば、ワクワクしますよね。

今、倉本さんもおっしゃいましたが、いくら形が変わっても、選手の気持ちが変わらないと男子ゴルフ全体が良い方向には行かないと思います。

そのためにはトップ5、トップ10に入るようなスタープレイヤーだけが頑張ればいいわけではなくて、約200人のプロが一緒の方向を見て改革を実行していかなければならない。

ドウ・スポーツの頂点は男子プロゴルフ

ですから、わたしの今の選手会長としての役目としては、せっかくこういう思いを持つてくださる方がいるんだということを選手たちに伝えて、考え直すじゃないですけど、選手自身が努力することが大事なんだという思いでいます。

い。そういうことで、NSSKさんから「こうした方がいいですよ」というアドバイスをいただきながら、われわれ自身もマインドを一気に変えていかなければならないと思っています。

——発想の転換が必要であると。

倉本 そうです。われわれは今、どん底にいますので、この底を蹴って、浮上できるか、で

きないかというのは、本当にNSSKさんとの連携にかかっていると思っています。

津坂さんにいつも言っていただけののは、今回立ち上げた「ジャパン・プロゴルフツアー（J-TOUR）」というのは、NSSKのものではないと。これは選手のものだから、選手が自分たちできちんと盛り上げていかなければならない。まずは

——今、どん底にあると言われたんですが、それはどういう意味ですか。

倉本 われわれも内心は、ゴルフというのは素晴らしいスポーツであり、多くの魅力が詰まったものだと思っています。ただ、その魅力をどう発信しているのかが分かっていないということと、長年、男子ゴルフというのは古い体質で来ましたか



つさか・じゅん

1961年東京都生まれ。83年ハーバード大学卒業。ハーバード・ビジネススクール(MBA)卒業。ゴールドマン・サックスニューヨークM&A部門のヴァイス・プレジデントとして勤務後、米国で約10年間プライベート・エクイティ投資活動に従事。2006年TPG(米)のパートナー及びTPGキャピタルのマネージング・ディレクター兼日本代表などを経て、14年に日本産業推進機構を設立、代表取締役社長をつとめる。

選手たちの中で、J-TOURをこういう方向に持っていくんだよという思いがなかったら、やる意味が無いと言うんですね。

ですから、われわれ選手たちが自覚を持って、これからいかに男子ゴルフを変革できるかというところが、今後の成功の鍵だと思っています。

ら、すぐに変革に向けて動くことができないという構造的な課題を抱えているのも事実です。

ですから、われわれ選手の側も頭の中で考えて、できる、できないではなくて、やらなければいけないんだという方向にマインドを変えていかなければならない。それを今、選手会と一緒に話をしているところです。

——なるほど。そういう話をNSSKさんから聞いて、改革の道筋が見えてきたということですね。

阿久津 3月の記者会見の時にも話をさせてもらったんですが、本当にゴルフ界の変革に立ち会わせていただけることが、わたし自身楽しみでしかありません。わたしがプロになって9シーズン目ですが、それまではなかなか変化の無かった業界だったんですね。

しかし、本気で男子ゴルフを盛り上げるために立ち上がるう、改革しようという気になったのは初めてのことです。日本のゴルフの歴史上でもおそ



あくつ・みきや
1995年栃木県生まれ。日本大学卒業。2017年プロテスト合格、『日本プロゴルフ新人選手権』で優勝。24年選手会副会長就任、25年『ミズノオープン』で初優勝。今季から選手会長をつとめる。

そして、今は完全に入れ替わってしまつて、女子ゴルフは人気だけれども、男子ゴルフはイマイチ人気が出てこない。残念ながら、今はそういう構造になっていくので、ここをNSSKさんと共に変革していきたいと思つていくのです。

チユアの子だったんですね。—— すごい年齢層ですね。
阿久津 15歳、31歳、70歳の人間が一緒に回る構図というのは、他のスポーツには絶対ないことだと思ひます(笑)。
そうした多様な世代の人たちが一緒に回ったり、プロとアマチュアと一緒に回ったり、それから男女一緒に回ることもできるスポーツはゴルフしか無いのです。そうした多様な方々が同じフィールドで競い、親交を深めていくというのは、非常に素晴らしいことだと思ひます。

つても続けられます。これは他の競技には無い特徴です。
先ほど、津坂さんが日本に約800万人の競技人口があると言いましたけど、その人たちは年間平均で11回プレーしているんです。ということは、国内だけで約8800万回もプレーしているんですね。こんなスポーツは他にないと思ひます。
そう考えると、日本における

ゴルフとは、ドウ・スポーツであつてウオッチ・スポーツではないんです。本来、ドウ・スポーツの頂点である男子プロゴルフというのは、憧れの対象であり、われわれも若い頃は有名な選手に憧れ、自分の練習に生かしたんです。ところが、90年代後半あたりから、そこが乖離し始めて、男子ゴルフは低迷し、女子ゴルフが台頭してきた。

というのはすごい数ですね。では、若い人の観点で、阿久津さんはゴルフの魅力をもどるように考えていますか。
阿久津 ゴルフの良さを話し出したらキリがないですが(笑)、先日の関西オープンで人生で初めて倉本さんと一緒に回らせてもらったんですよ。その時にいたもう一人が、別のプロの息子さんと、まだ15歳のアマ

もう一つは、わたしは子供の頃からゴルフを始めたのですが、小学生の時にいい意味で優越感をもっていたのが、全国に友達がいるということ。ジュニアから高校、大学を経て、アマチュアから社会人、プロもシニアの方からスポンサーの方々まで、全国にいろいろな人脈ができたことは、本当に自分の人生を豊かにしてくれました。
今後もしやそうしたゴルフの魅力というのは変わらないと思ひま

すし、もつと可能性を広げていきたいと思ひています。
グローバルな架け橋となつていけるような仕組みづくりを

—— ゴルフには様々な可能性があるということですね。

津坂 そういうことです。可能性しかありません。だからこそ、いわゆる、ビジネスの仕組みをしつかりと最適化していくことが大事なんです。

すでに約800万人のゴルフ人口があり、選手もいる、大会もある、スポンサーもいる、ファンもいる。ゴルフに対しての関心度が非常に高いわけですよ。それをどうやってプロゴルフとして、男子ゴルフとして価値を向上し、魅力を表に出していくかということ。それを選手の皆様、スポンサーの方々と一緒になつて実現したいんですね。

わたしがよく聞かれるのは、海外で活躍する選手を育てることが夢ですかと。でも、そうではなくて、海外の選手が日本でプレーしたいと考えるようなツ

アーをつくるのが、われわれの夢なんです。男子ゴルフを世界に通じるコンテンツにし、世界に羽ばたけるようにしたいと考えています。

阿久津 やはり、海外の選手が日本のツアーで優勝することを目標としてくれれば、嬉しいですよ。

ゴルフを真に活性化させるためには、日本で活躍した選手が海外に出て行くための架け橋も必要ですが、海外の人たちが日本にやってくる架け橋も両方必要です。お互いが双方でグローバルの架け橋となつていけるような仕組みを、われわれ選手としてもつくつていけるようにしたいと思ひます。

倉本 繰り返しになりますが、ゴルフは若い人とお年寄りが一緒にプレーでき、様々なジャンルの人たちが一緒にプレーできる稀有なスポーツです。そうした良さをもつと広げていきたいと思ひますし、プロのすごさというものをもつと多くの方に知ってもらいたいですよ。

わたしの若い頃は、日本と米国のPGAツアーでそんなに差が無ひと言われていました。実際に青木功さんや丸山茂樹さんが優勝したりしていました。

今は松山英樹プロや金谷拓実プロくらいかもしれませんが、それでも海外で活躍している選手が徐々に多くなつてきました。

こうした選手が増えてくればファンも増えてくると思ひますし、注目度も上がつてくる。そうした土台を若い人たちと一緒につくつていきたいと思ひます。



3月に行われた記者会見の様子